

報告書

2021年度 高校模擬国連国際大会への
第15回日本代表団派遣支援事業



目次

はじめに (理事長挨拶)	2
団体紹介 (グローバル・クラスルーム日本委員会)	3
事業概要・派遣報告	5
参加者報告	7
アドバイザー	7
派遣生	10
支援団体一覧	37
日本航空株式会社様からのメッセージ	40
ACCU からのメッセージ	41

はじめに (理事長挨拶)

この度、高校模擬国連国際大会への15回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆さまにお届けできる運びとなりました。本事業にご後援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆さまからの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業は2020年11月14日から15日に行われた第14回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた8校16名（ただし2校の3名が辞退）の高校生が、日本代表団として国際大会に参加するというものです。今回、日本代表団はインドの大使として世界中の高校生が集まる舞台上、できる限りの準備をして会議に臨みました。

今回の派遣支援事業において派遣生は皆、持てる力を総動員して世界に挑戦しました。オンライン上ではありましたが、世界中の高校生たちと議論を交わす中で、うまくいくこともあれば思い通りにいかないこともあったはずですが、そうして世界の広さを肌で感じることは、自分の能力や将来について考えだす大きなきっかけとなったのではないのでしょうか。派遣生が今回の派遣を「スタートライン」として捉え、新たな未来への一歩を踏み出すことを心より願っております。

最後に、本書が多くの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動のさらなる普及と発展の一助になることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会
2021年度 理事長 渡邊玲央

団体紹介(グローバル・クラスルーム日本委員会)

グローバル・クラスルーム日本委員会は、高校模擬国連活動の普及と発展を目指し、全日本大会の開催及び国際大会への派遣支援活動を行う団体です。私たちは、「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出する。」という理念に基づいてこれらの活動を行なっています。

2007年、グローバル・クラスルーム日本委員会が日本で初めて高校模擬国連国際大会への日本代表団の派遣支援を行ったことから、日本の高校模擬国連活動が本格的にスタートしました。それ以降、全日本高校模擬国連大会を毎年開催し、優秀な成果を残した生徒の高校模擬国連国際大会への派遣支援を続けています。なお、2012年から2021年6月まで、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターと事業を共催しておりました。

会員

アドバイザー(敬称略)

特別顧問 明石 康

公益財団法人京都国際会館理事長／元国連事務次長

評議員(敬称略・順不同)

議長 星野俊也

日本模擬国連 OB／大阪大学大学院国際公共政策研究科 教授／前国際連合日本政府代表部大使・次席常駐代表

紀谷昌彦

日本模擬国連 OB／在シドニー総領事

中満 泉

日本模擬国連 OG／国連事務次長および国連軍縮担当上級代表

澤田宏

岐阜県立岐阜高等学校教諭

竹林和彦

早稲田実業学校教諭

中村長史

日本模擬国連 OB／東京大学大学院総合文化研究科特任助教

米山 宏

公文国際学園中高等部教諭

理事会(敬称略・順不同)

理事長 渡邊玲央

東京大学教養学部国際関係論コース 3年

研究主任 柿崎瑞穂

東京大学文学部社会学専修 3年

広報主任 小林妃奈

慶應義塾大学法学部政治学科 3年

事務主任 三浦紘

慶應義塾大学経済学部経済学科 2年

研究 小倉夏子

上智大学国際教養学部国際教養学科 3年

研究 近藤紀仁

早稲田大学政治経済学部政治学科 2年

研究 田部井淳志

東京大学教養学部理科一類 2年

川崎莉音

東京大学教養学部文科一類 2年

佐藤茜音

青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科 2年

高田陽一郎

慶應義塾大学環境情報学部 2年

田口蒼依

慶應義塾大学商学部商学科 2年

丹後向日葵

早稲田大学国際教養学部国際教養学科 1年

西田翔

慶應義塾大学法学部政治学科 1年

花井涼平

慶應義塾大学法学部法律学科 3年

持松進之介

慶應義塾大学経済学部経済学科 1年

山内梨々花

上智大学法学部法律学科 1年

事業概要・派遣報告

【企画名称】

2021 年度高校模擬国連国際大会への第 15 回日本代表団派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会 (JCGC)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

【日程】

2021 年 5 月 6 日(木)～5 月 8 日(土) 高校模擬国連国際大会

2021 年 5 月 10 日(月) 中満様オンライン表敬訪問

2021 年 6 月 20 日(日) 報告会

【開催形態】

オンライン

【内容】

米国国連協会などの主催により開催される高校模擬国連国際大会(Global Classrooms International High School Model United Nations Conference)に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第 14 回全日本高校模擬国連大会にて選出された高校生が日本代表団として参加するための派遣支援事業である。

1) 日本代表団 (13 名)

開智高等学校

高橋侑里、福井達於都

駒場東邦高等学校

伊藤碩、坂崎遼太郎

渋谷教育学園渋谷高等学校

江口花音、高槻俊輔

高水高等学校

丸小野成輝、森脇優

桐蔭学園中等教育学校

青木研人、田端開

灘高等学校

一高学仁

宮城県立仙台二華高等学校

田中愛莉、三浦花梨

2) グローバル・クラスルーム日本委員会 (3 名)

研究主任 柿崎瑞穂

研究 小倉夏子

理事 高田陽一郎

【派遣日程】

5月6日(木)	トレーニング・セッション
5月7日(金)	高校模擬国連国際大会 会議1日目
5月8日(土)	高校模擬国連国際大会 会議2日目
5月10日(月)	中満泉国連事務次長 オンライン表敬訪問
6月20日(日)	報告会

【参加会議】

高校名	氏名	会議名	議題
開智高等学校	高橋侑里 福井達於都	世界保健機構 (WHO)	Addressing Mental Health Needs in Protracted Humanitarian Crises
駒場東邦高等学校	伊藤碩 坂崎遼太郎	国連貿易開発会議 (UNCTAD)	Bio-trade in the Global Economy
渋谷教育学園 渋谷高等学校	江口花音 高槻俊輔	国際電気通信連合 (ITU)	Achieving Worldwide E-Governance
高水高等学校	丸小野成輝 森脇優	国連総会第三委員会 (SOCHUM)	Promotion of New Technologies to Fight Malnutrition
桐蔭学園中等 教育学校	青木研人 田端開	国連総会第一委員会 (DISEC)	Combating the Issue of Lethal Autonomous Weapon Systems
灘高等学校	一高学仁	世界銀行 (WB)	Impact Blockchain Bond on Mainstream Investment World
宮城県立仙台 二華高等学校	田中愛莉 三浦花梨	国際通貨基金 (HIMF)	Responding to the Global Financial Crisis

【受賞】

本年度、日本代表団は全校が賞を受賞しました。また、当団体は優れた大使を多数輩出した団体として、Top Delegations を受賞しました。

【最優秀賞 (Secretary General Award)】

渋谷教育学園渋谷高等学校、桐蔭学園中等教育学校、灘高等学校

【ポジションペーパー賞(Position Paper Award)】

仙台二華高等学校

【奨励賞(Best Improvement Award)】

開智高等学校、駒場東邦高等学校、高水高等学校

【優秀団体賞(Top Delegations)】

グローバル・クラスルーム日本委員会

参加者報告(アドバイザー)

高田陽一郎

慶應義塾大学環境情報学部 2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

模擬国連は、国際大会の知識をはじめ、情報収集能力および政策立案の能力、会議での議論や交渉の能力などの人生で必ず役に立つ能力を得られる素晴らしい競技です。しかし、常に時代に合わせて変化していく必要があります。そんな今、最も求められていることは変化に対応する力である、と私は思います。今年度の派遣事業を思い返せば、まさに「変化への対応」が求められていました。

私が1年間受け持つことになったのはオンラインの全国大会で選び抜かれた、会った事のない13名の高校生でした。その当時は、まさか派遣事業の最後の最後まで会うことができずには想像もしていませんでした。その後、本当に大会が開催されるかどうかもわからない状態で、様々な状況を想定した対応が求められました。そしていざ大会が開催されると、新しいプラットフォームの利用や新しい会議ルールの追加など例年以上の混迷を極めました。

このようなイレギュラーな派遣事業となり、派遣生には心配や不安をたくさんかけてしまったと思います。思い返せば私が12期派遣生として渡米した際には、当時の研究や理事の手厚いサポートを受けながら、安心して会議に臨むことができました。自分と同じことを派遣生に与えてあげられたらどうかと常に自問自答してしまいます。しかし、変化への対応力を身につけた15期派遣生は、どんな試練にも柔軟に対応してくれました。派遣事業を進めていくにつれて、間接的にもそのような成長がはっきりと伝わってきました。

派遣事業を経験した人はよく「世界大会で人生が変わった」と言います。私もその一人です。オンラインで直接会うことは叶いませんでしたが、例年にも負けないくらい派遣生が様々な試練を乗り越え、成長したと確信しています。ここから大きく飛躍し、さらに成長した派遣生のみんなといつか会えることを楽しみにしています。

柿崎瑞穂

東京大学文学部社会学専修3年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究主任

初めに、今回の派遣支援事業にご支援ご協力賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。私は今回の派遣支援事業におきまして、準備から当日に至るまで、一連の会議サポートの役割で派遣生と関わってまいりました。

本年度はコロナウイルスの影響を受けてから初めてのオンライン派遣となりました。そのため、派遣生には変則的な対応をお願いすることが多々ありました。現地派遣からオンライン派遣への変更が決定したのが3月上旬であり、そこから通常約半年かけて行う準備を2か月に再編したプランを提示した際には、私自身もどこまで派遣生の準備が可能なのかは計りかねるところでした。しかし実際には参加を決めてくださったすべての派遣生が予想を大きく上回る高水準の会議準備を行ってくださり、担当国インドに関し、議場によっては最新の情勢を踏まえながら、政策立案を完成させてくれました。

そして迎えた会議当日、派遣生は言語の壁や形式面での国内大会との違い、開催時間の不利などにもめげずに、果敢に自分たちがその会議に最大限の貢献をするための努力を見せてくれました。誠実な対話の姿勢を崩さず信頼醸成に腐心したり、練り上げた政策を議場に共有するための説得を根気強く続けたりと、派遣生たちの活躍は目を見張るものがありました。さらに、疲労の中でも振り返りを怠らず、1日目の反省点を生かして2日目の会議行動をより良いものとしようとする自らの成長や大使としての成功にどん欲な姿勢がすべての派遣生から見られたことは特筆すべきことと思います。

15期派遣団が残した結果は大変素晴らしく、今回の派遣事業が派遣生にとって一過性のイベントや終着点ではなく、集大成としてのターニングポイントでありながら次につながる成長の機会を掴む契機としても位置づけられるであろうことを感じ取っております。派遣生個々人の中では当然、できたこと・できなかったことがあったと思いますが、これまでサポート役として携わった身として、彼ら・彼女らならば納得がいくまで反省点と向き合い、そして次につなげるエネルギーに変えていけると確信しております。こうした熱い姿勢を見せてくれた頼もしい派遣生たちの今後のますますの飛躍が今から大変楽しみです。

最後になりましたが、今回の派遣支援事業にご支援ご協力賜りました皆様に改めて感謝を申し上げるとともに今後の活動にご厚誼賜りますよう、よろしく願いいたします。

小倉夏子

上智大学国際教養学部国際教養学科 3年
グローバル・クラスルーム日本委員会 研究

はじめに、平素より本委員会の国際大会派遣事業にご賛同・ご支援・ご協力いただいている全ての皆様に深く御礼申し上げます。ここでは、3年研究として派遣生の会議準備をサポートした立場から、本事業について振り返りたいと思います。

派遣生は例年、ニューヨークの国連本部に赴き大会に参加しますが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、全てオンラインでの開催となりました。大会の2ヶ月前にオンライン開催確定の旨が大会側から通達され、派遣生はそこから会議準備を始めたため、例年に比べ会議準備のスケジュールが非常にタイトでした。その中でも派遣生は目の前の課題に着実に取り組み、綿密なリサーチと緻密な会議戦略を立てて会議に臨みました。

今年度の担当国はインドでした。派遣生は短い準備期間の中でも、国際社会の目指すべき理想と現状とのギャップを冷静に分析し、ギャップを埋めるために果たすべき役割を真剣に考察していきました。IT先進国である強みを生かした政策を立案する派遣生も多く、実現可能性と新規性とをバランスよく論理的に盛り込んでいました。

そして迎えた会議本番。派遣生は、言語やオンラインの壁、時差、また会議中の予想外の出来事にぶつかりながらもそれらを乗り越え、120%の力を発揮していました。対話を重んじた誠実な交渉姿勢で周囲の大使に主張を伝えたり、チャット機能等を用いてコミュニケーションに工夫を凝らしたり、冷静に議場の様子を分析したりすることで、着実に目の前の困難を乗り越えていきました。1日目の会議後に派遣生との電話メンターを実施した際、インド大使として議場にどう貢献し議論を前進させることができるかについて、それぞれが真剣に模索していた姿が印象的でした。こうして初のオンライン国際大会で、それぞれが思い思いの大使像を実現できたのではないかと思います。

大会を終えた派遣生からは、「将来の進路を考えるきっかけになった」「人として大切なことを学ぶことができた」といった声を聞きました。国際大会派遣事業が派遣生にとって、模擬国連という範疇を超え社会と自分自身との関わり方等を改めて考える契機となったことを、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員として非常に嬉しく思います。

最後に、本派遣事業にご協力・ご支援賜りました全ての皆様に深く感謝を申し上げ、私からの事業報告とさせていただきます。

参加者報告 (派遣生)

高橋侑里

開智高等学校

まず初めに、オンライン開催という前例のない形でありながら私たち派遣生を全面的に支えてくださったグローバルクラスルーム委員会の方々、支援してくださった皆様全てにこの場を借りてお礼を申し上げます。新型コロナウイルス感染症の影響で様々な活動に制限がかかる状況ながら、非常に刺激的で貴重な経験ができる場を得たことをありがたく思います。

私にとっての高校模擬国連は他の派遣生とは少し違ったものでした。なぜなら、私は全くの初心者であり、全日本大会が初経験、この世界大会が二回目の模擬国連だったからです。そしてどちらもオンライン開催だったため、対面の雰囲気や気迫は未だに味わったことはありません。全日本大会のときは初心者と思われないこと、相方の足を引っ張らないことを目標に、世界大会ではとにかく悔いの無いようにしよう、楽しもうという意気込みで挑みました。そのため、会議準備の段階で当日の会議の進み方や起こりうる事態、自分の立ち回りなどを十分に推測、対策できたかという決してそうでは無かったと思います。経験値が十分に無い自分が会議に貢献し、かつ自分の目標を達成するためにできることは、ただ必死になることだけでした。それに加え英語も流暢ではない私にとって、この国際大会は、自分は必死になれば一体どこまでできるのだろうかという未知数を計る場という意味合いが強いものでした。結果からいうと、上出来だったと思います。もちろん、会議を経て自分に足りないものを痛感しました。会議中はプラスな感情よりも悔しい気持ちの方が勝っていました。特に言語の壁は痛烈に感じました。会話に入れないどころか、完全な理解もままならない場面も幾度かありました。発言しかけたけれど、英語が出てこなくて躊躇したらそのまま機会を逃した、という瞬間も幾度もありました。時間をかけ、相方と具体的に練って持っていた政策が中心となっていたいくつかの国から評価を得ていた分、政策を提案して賛同を得るところより先に進めなかったことは非常に悔やまれます。しかし上出来だったと自分で言えるのは、不格好であっても最後まで必死な姿勢を通すことができたからです。模擬国連は、黙り込んでしまえばそのまま会議終了を待つこともできる競技です。インド大使が担うべき責任に目を背ければ、参加するだけのことは誰にでもできます。何時間もパソコンと向き合った会議準備と、当日の会議行動が目に見える形で評価していただけたのは本当に嬉しいことですが、例え賞が取れなくても清々しく終わることができていたと思います。そう思えるほど、やり切ることができました。そして自分でそう思えるほど、幸運なことはありません。

私は模擬国連を通して、多くの、とても大切なことを学ぶことができました。また、模擬国連に取り組んでいなければ鍛錬されることの無かったであろう能力を磨くこともできました。国際情勢への興味や知見、自分も未来の人材の一員なのだという感覚、交渉力、問題解決能力など本当に身になることばかりです。人間として、大いに成長することができたと思います。改めて、模擬国連をやって良かったと実感しています。さらにこの派遣事業では、中満泉さんに表敬訪問をさせていただく機会もありました。国際的な舞台で活躍し、世界平和に多大なる貢献をしておられる中満様のお話を聞き、私も国内国外ということに囚われずどこであっても自分の力を発揮でき、周りに貢献できる人材になりたいと強く思いました。また、「お仕事の上での責任の重さにどう向き合い、対処しておられますか」という質問をさせていただいた際、中満様は「とにかく誠実に、一生懸命自分が納得できるまでやるしかない」「リーダーとなる人には弱い立場の人の苦しみ、痛みを分かろうとする努力ができる人であってほしい」とおっしゃっておられました。模擬国連では一国の大使として会議に参加するものの、実際に担当した国の国民の生活や命を背負っているわけではありません。しかしこれから社会に出て、誰かに貢献できる働きをしようとする、同時にその人々への責任も実際に負うこととなります。取り組んでいることに全力を尽くせるというのは自分の強みでもあり、模擬国連を通して伸ばすことができた部分でもあります。その長所をより伸ばし、かつ自分に足りていない多くの部分を克服して社会に貢献できる人材を目指したいと思います。派遣事業を通して、自分が今後学ばなければならないこと、身につけなければならない力がクリアに見えてきました。この派遣事業での感情、成長、学び、気づきを忘れず進んでいきたいです。

最後になりますが、全日本大会の書類選考のときからほぼ1年、協力しつつ共に頑張ってきたペアの福井くんに本当に感謝したいと思います。福井くんの鋭い視点や意見、会議戦略にいつも助けられてきました。一緒に会議に出る上でとても心強く、何より楽しかったです。本当にありがとう。約1年、グローバルクラスルームの皆さんにも本当にお世話になりました。最高の経験をありがとうございました！

福井達於都

開智高等学校

高校2年の11月、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、ペアの高橋と全日本大会で優秀賞をいただきました。この栄誉は、ずっと憧れていた国際大会への切符だと信じていた気持ちがありながらも、収まることのないパンデミックに気持ちは沈んでいきました。しかし3月の下旬、僕たち派遣15期に朗報が飛び込んできました。国際大会のオンライン開催が決まったのです。準備期間は一カ月弱。当日も含めて非常にタフな経験でしたが、国際大会を夢見て議論を交わした全国のモギコッカーたちの思いが、挫けそうな時も気持ちを支えてくれました。

私たちは今回、WHOの「Addressing Mental Health Needs in Protracted Humanitarian Crisis」にインド大使として参加しました。インドはまさに今、新型コロナウイルス感染症が蔓延しているという危機的な情勢にあります。それゆえに、政策の立案には頭を悩ませました。様々な文献や資料を調査してなんとか捻り出した「マッチング理論とインドのIT技術を駆使した適時、適材、適所」の政策は会議本番で想像以上の反響をいただくことができ、リーダー国にDRの核の一つとして記載してもらうことが出来ました。マッチング理論は高校二年の時に経済学と法学どちらが自分の学びたい分野なのかを知るため、それぞれの学問を調べていた際に知ったものです。私は法学を選んだため、経済学に費やした時間は無駄なものだったと思っていきましたが、時を経て実を結びました。

話は変わりますが、派遣事業で表敬訪問をさせていただいた中満様に、「国際問題のような答えのない問いとどうやって向き合ってきたのですか（格差と不平等について、アフターマティブアクションと逆差別のジレンマを例示しながら）」と質問させていただくと、中満様は、「格差や不平等の問題は必ずどこかで終わらせなければならない問題。アフターマティブアクションはあくまでもその目標に向かうための一つのツール。今、このときの沢山の人の努力が長い目で見たときの一つの支援となっている。」と、した上で、「格差や不平等に代表されるような答えのない問いには多くの要素が複雑に絡み合っている。今までは、貧困なら貧困、軍縮なら軍縮、と単一的な見方で、その解決を図ってきたが、現在、多くの国連幹部はこうした手法に問題意識を持っている。切っても切り離せないこれらの問題に、点と点を結ぶように総合的に取り組む『connecting the dots』の姿勢が大切だ。」とお話してくださいました。

「Connecting the dots」という言葉を聴くと、スティーブ・ジョブズのスタンフォード大学の卒業式辞が思い起こされます。彼はスピーチの中で、大学でたまたま学んだカリグラフィ

ー（字を綺麗に見せる手法）が、のちにコンピューターの綺麗なフォントの開発に役立ったという話をしています。カリグラフィーの知見が、時を経てコンピューター分野での大きなアイデアをもたらしてくれたのです。ある出来事の価値は、その時の立場からだけでは計り知れず、別の立場になった時にその出来事の価値が生まれてくる場合があるのだということです。この1連の出来事をひとことで説明したのがまさしく「Connecting the dots」という言葉なのです。

振り返ってみれば、今回の派遣事業は色々な点が線となって表れたものでした。先ほどの政策の話は、過去の私の経済学に対するリサーチと、人道危機下におけるメンタルヘルス対策という二つの点が線として繋がったものです。また、今回のオンライン国際大会への参加も、昨年度、急遽、ニューヨーク派遣及び国際大会が中止になるという事態となった中、大勢のモギコッカーがオンライン会議を開催し、模擬国連が存続したことがあってのことだと思います。14期生の皆さんの国際大会の準備に費やした半年間からのこの一連の流れが全て一つの線となって、今回、我々15期生と結びついたからこそ、史上初の全チームが受賞という快挙に繋がったのだと確信しています。14期派遣生をはじめ、全てのモギコッカーに感謝申し上げます。

最後にはなりますが、ペアの高橋、そして、顧問の佐藤先生、ピーター先生をはじめとした多くの先生方、ACCU並びに、会議準備を手伝ってくださったJCGCの大学生の皆さま、両親、これまでお世話になった全ての方々に感謝を申し上げます。本当に有難うございました。

伊藤碩

駒場東邦高等学校

僕たちが国際大会の議題として取り組んだのは、国連貿易開発会議（UNCTAD）で扱う「Bio-trade in the Global Economy」です。生物多様性の確保は、温暖化対策などと同じく人類の未来を守るために対策が不可欠と言われていています。僕たちの参加した議場では、そのために必要となる生態系の保護や遺伝情報の権利確保のために、各国がどのようなルールに基づき協調して行動するべきかを考えるというテーマについて話し合いました。一方で、このテーマは国際社会の認知度がまだ低いことに加えて、自由貿易を志向する先進国と、取引に一定の規制を要求する発展途上国との間での深刻な利害対立によって、目標達成に向けた取り組みが大幅に遅れています。世界各国の高校生が集まる大会で、自分たちの模擬国連活動の集大成として、この難題に一石を投じたいと僕たちは考えました。

ついに始まった大会初日でしたが、日本で経験してきた模擬国連との大きな差に戸惑い、その対応に苦しむスタートになりました。僕たちの議場では議長の決定権が強く、進行に関する提案の大半が受け容れられなかっただけでなく、日本にはないルールが優先されるなどの想定外が次々に起こり、随所で反論を試みた自分たちインド大使が、孤立を深める状態で一日目の会議を終了しました。このときは、相次ぐトラブルに対して自分たちの何が間違っていたのかがすぐには理解できず、「これが国際大会の壁か」と頭を抱えました。明日どうやってこの状況を立て直すかを GC の大学生方と議論する中で、相手国とお互いの状況を冷静に確認し、ゴールへの道筋を共有することを勧めていただきました。価値観ややり方は異なっても日本でやってきた会議の原点に立ち戻ろうと思い、ペアと気持ちを鼓舞し合いながら二日目に臨みました。

二日目は、議論の深掘りと決議案（DR）の作成を進めました。初めに、モデの場でインドが重要視する論点を「DR に盛り込むべきか」について各国の意見をしっかりと聞き、盛り込むコンセンサスを取り付けました。次に、その論点についてグループ内で、我々の解決策が共有するゴールの実現に役立つことを伝えました。結果的に、インドの本来の提言をほぼ盛り込むことになり、むしろそれがメインになった決議案が出来上がりました。議長や他グループとの質疑でも、論点はインドの政策に関するものが中心になり、自分たちが自信を持って答えることで議場をリードしている感覚が徐々に生まれてきました。最終的に朝 4 時、賛成多数で承認を得ることができ「長かった夜」が明けました。

今回受賞した Best Improvement Award は、この二日間を総括した際に、絶望だった一日目からの立ち直りを考えると、自分たちにふさわしい賞だと思います。カルチャーショックに

よる孤立から始まり、議場の主導権を取るに至るまでの「反転攻勢」の二日間は、自分たちにとって数多くの学びとともに忘れられない思い出になりました。

どんな劣勢でも一緒に **Face Up** して英語で喋りまくってくれたペアの坂崎くん、いつも親身に相談に乗ってくださり、有益なアドバイスをくださった **GC** スタッフの方々、そして日本派遣団としてともに戦った各校の仲間たち、落ち込む僕たちをいつも明るく鼓舞してくださった顧問の藤山先生には、心から感謝してもしきれません。

たとえ、常連校としてのノウハウがなくても、国際舞台に立った経験が皆無でも、気後れするぐらい語学力が追い付かなくても、世界を相手に戦い、自分たちの手で作り上げたゴールを共有出来ることを学びました。後輩の皆さんが僕たちのように、模擬国連を時に苦しみながら、最後には心から楽しんで感動を仲間たちと分け合えることを心から祈っています。このような機会をいただき、ありがとうございました。ここで学んだものを、今後は実社会で実現させていける人間を目指したいと思います。

坂崎 遼太郎

駒場東邦高等学校

今回我々が担当した会議は UNCTAD の Bio-trade です。Bio-trade とは、環境的、社会的、経済的持続性の観点において、自然の生物多様性から派生する商品やサービスに関する収集、製造、移転、取引等の活動を指し、製薬、化粧品、食品、観光、インテリア業界などを始めとして、生物多様性に基づく価値が探求・研究され、実用化・加工等によって市場に提供され、人々の生活向上に貢献しています。

会議準備に当たっては例年と違い、限られた時間で、Bio-trade に関する問題を包括的に調べる必要があったため、「浅く広く」調べるとともに、インド（担当国）の国益が大きく関わっている論点に関しては、各種条約、宣言文書、議定書や、国連での論点に関わる議論の過程を徹底的に調べることで、自分たちで作った政策を確実に相手国の大使に説明できるよう準備しました。

1 日目の会議では約 6 時間の会議の中で、約 4 分の 3 がモデの時間に割かれ、各国の大使が Bio-trade に関する議題について意見を交換し、DR 作成に向けて協力できる国をお互いに見極めました。モデではまず、各大使が「海洋汚染の問題について」、「外来生物の移動について」や「持続可能な経済成長」といった、自国に関連する論点を自由に設定し、1 カ国約 1 分あたりでその論点に対する自国の意見を表明する、というサイクルが制限時間まで続けられました。日本の模擬国連と比較すると、論点が事前に提示されていないため、自由な議論を行うことができるという反面、各論点に関して、文言レベルでの深まった議論を行うことができない、という短所があると感じられました。

約 2~2.5 時間のモデが行われたのち、議長の裁量で、約 15 分のアンモデ が開かれ、2 つのブロックに分かれて、WP の作成に取り掛かりました。WP の作成において、インドは「プラスチックゴミ削減に関する取り決め」をテーマとしたグループに参加し、文書を作成しました。アンモデにおける文書作成の過程は我々にとって、最もアメリカと日本の模擬国連のあり方の違いを実感させられるものでした。まず、日本でもアメリカでも、文言作成においては、自国の文言を周りに説明して理解が得られた場合、その文言を WP に挿入する、というおおまかな過程は変わりませんが、日本では多くの大使が文言の中に国益が担保されていることを重視することが普通であるのに対し、アメリカの模擬国連では国益に敏感な大使が少ない印象を受けました。（逆に国益を顧みずに行動する大使も見受けられました。）例えば、アメリカ大使は新たにプラスチックゴミを削減するための機関を設立し、自国の資金

を設立の際に融通することに積極的でした。また、Bio-trade の問題点全てを包容した文書を作る必要がなく、自由度の高い文書作成が可能であることは印象的でした。

2日目の会議では、前半の1時間程度は1日目と同じ形式でモデを行い、簡単な意見交換を行ったのち、後半の約2時間は、アンモデを設け、WP から発展した DR の作成を中心に行いました。インド代表としては、この時にプラスチックゴミの削減だけでなく、改革の柱の二番にある経済成長（発展-途上国間の利益分配問題やバイオパイラシーに関して）を新たに文言として DR に挿入することを希望しましたが、WP のタイトルとは食い違っていたために、他のメンバーから賛同が得られませんでした。そのため、最終的には WP と同様の内容で DR を作成しました。そして、約1~2時間の文書作成を経て、我々が所属するブロックともう一つのブロックで DR の説明を行ったのち、両方の DR を統合、提出し、会議は終了しました。

会議全体を振り返ると、1日目の会議でも触れましたように、議論する論点の自由度が広いことと、日本にはないルールに驚かされました。また、使用言語が英語であることも相まって、会議の当初は発言することに緊張感を覚えましたが、会議が進むにつれて、その雰囲気にも慣れ、他の参加者とは対等に議論することができたと感じています。今回の会議で学んだことは、ミスを恐れず、積極的に行動し続けることです。会議中には現地のルールがわからず、そのように議論に参加すれば良いのかわからない時が多々ありました。しかし、そのような場合には議長に“Point of Order”や“Point of Inquiry”などを使用して、積極的に質問を行うことで、会議の仕組みを理解することができたと感じています。また、DR や WP の作成過程で、自国の政策を入れて欲しいとき、拙い英語であることを恥じずに根気強く自国の政策を説明することで、最初は乗り気でなかった、または意見が食い違っているように見えた大使にも自国の政策を納得してもらうことができました。そのため、今回の派遣事業では、根気強さ・行動力の大切さを学ぶことができたという点で、非常に貴重な経験となりました。

江口花音

渋谷教育学園渋谷高等学校

高校模擬国連国際大会（オンライン開催）に出場し、Secretary General Award をいただきました。まずは、この機会を設けてくださった、GC や ACCU の皆様に感謝申し上げます。そして、全日の準備を始めてから一年弱ずっと私たちを全力でサポートしてくださった顧問の先生方、先輩方には心から感謝しています。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインになってしまいました。ニューヨークで本場の国連総会の雰囲気味わえず残念でしたが、オンラインで国際会議ができたことは非常に学びの多い機会となりました。ニューヨーク時間に合わせるため、昼夜逆転の生活を送った4日間は、予想したほど辛くはありませんでした。人生に一度しかないであろう面白い経験となっただけでなく、21世紀の今、世界がこんなにも繋がっているのだとあらためて感じました。コロナで人と人の距離が遠ざかってしまった一方で、オンラインを利用することでどの国の人とも簡単に繋がることができ、世界中の人との距離は近づいた気がします。

私たちは、International Telecommunications Union の議場で、「Achieving Worldwide E-governance」という議題で会議に参加しました。2日間を通して世界で電子統治を実現するために必要な支援、情報格差、AI、IT の議論に必ず関わってくるサイバーセキュリティーなど様々なテーマについて議論が行われました。会議の当日まで参加国も分からず、全日本大会とは違う点も多く、とても緊張して当日を迎えました。1日目では、支援国、非支援国の2グループに分かれてWPを、2日目には合体して1つの決議案を提出しました。2日目には、サイバー攻撃が起こるなどのクライシスの対応も必要となりました。日本の会議とは違いモデが多く、わいわいとディスカッションをする時間より正式な討議の方が多かったです。また、オンラインという特殊な環境のため、コミュニケーションが制限されてしまいます。同時に話すことはできず、表情や仕草が見えにくいため、発言の内容そのものが重視されるように感じました。丁寧に相手の発言を聞き、いかに完結かつ的確に内容をまとめ、相手に効果的に伝えるか、話すトーンや速さ目線といったオンラインでも伝わるコミュニケーションを工夫しました。

今会議でとても印象に残っていることは「GCIMUN の記録に残って誇らしく思えるように成果文章を作りなさい」という議長の発言です。自分の模擬国連での活動が、他の人に影響を与えるとは考えたことがなく、驚きました。実際の国連であれば、採択され決議案は国際社会に大きな影響を与え、歴史にも残ります。それを模擬する模擬国連でも、自分たちが

作る決議案に対する責任感をもち、会議を進めていくことの大切さを感じました。議長は会議を通して SMART（Specific, Measurable, Achievable, Realistic, Timely）なアクションプランを立てることを常に推奨し、私たち大使は文言作成の過程で「誰が、どのように、いつ実行するのか」まで詰めて議論しました。これまで参加した会議の決議案の中で一番実効性のある文言となり、採択された時には達成感がありました。

私が模擬国連を始めるきっかけともなった模擬国連の魅力の1つとして、多様な国の視点から物事を考え、各国の立場から交渉することの楽しさがあります。今までに自分が考えたこともなかったような発想に出会うことも多々あり、国によって同じ問題に対するスタンスがどれだけ違うかということは興味深いことです。さらに、国際会議では、大使として代表する多数の国の視点に加え、参加者本人たちの出身国の視点をみることもできました。今までは、国内の会議にしか参加したことがありませんでしたが、今回は世界の様々な国からの参加者と議論を交わすことができ、とても楽しかったです。各代表が考えた政策をまとめ、共通のゴールに向かい、会議をリードしていく経験は国際会議ならではの経験です。本場の国連でも、世界各国を代表する大使が集まって議論をします。今会議は、その本場の国連に少し近づいた経験ができたように感じます。

今振り返ってみると、2020年全日本大会の準備を始めた7月からの一年でどれほど自分が成長したかが実感できます。国内及び国際大会のために数え切れないほどの時間を費やし、リサーチや話し合いを重ねて準備し、これほど1つのことに集中し深く学ぶ機会には本当に貴重なものです。理想の大使像を考える上で、1人の人としての自分を振り返り、目指すリーダー像を考えることもできました。この機会を通して学んだ大切な教訓を忘れず、模擬国連活動はもちろん、これから出会う様々な活動にも活かしていきたいと思います。

高槻俊輔

渋谷教育学園渋谷高等学校

5月6日から8日にかけて高校生模擬国連国際大会がオンラインで開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響で大会の開催自体が危ぶまれる中で開催まで漕ぎつけて下さった Global Classroom International の皆様、イレギュラー続きながらも手広く派遣生をサポートして下さったグローバルクラスルーム日本委員会の皆様並びに ACCU をはじめとしたスポンサーの皆様、そして昨年7月の全日本大会の書類選考課題公開時より支えて下さった先生方、先輩方、友人、家族には感謝が尽きません。本当にありがとうございました。

2020年は模擬国連にとって「変革の1年」でした。新型コロナウイルス感染症が日本でも本格的に蔓延し始めた2月を最後に対面会議は中止となり、対面以外での体系的な活動方法が確立されていなかった模擬国連は会議数も大幅に減少し、一時停止を余儀なくされました。その後 Google Meet, Zoom, Adobe Connect 等実施媒体や、メモ回しに関するルール等プロシージャの試行錯誤を経て活動は段々と再開し、昨年の全日本大会や今回の国際大会がオンラインで開催されるなどコロナ禍における模擬国連の「ニューノーマル」が確立され、最近では会議数もパンデミック以前の水準まで回復したように思います。

この模擬国連がスローダウンしていた約半年間は、それまでがむしゃらに会議に参加していた私の歩みを半ば強制的に止め、模擬国連への関わり方を考え直す契機となりました。模擬国連で扱われる議題は「地球温暖化」や「人権」など、高校生による議論の範疇を超えたものがほとんどです。加えて、準備期間の短さ、そして2日という会議期間を鑑みると、これらの大規模かつ複雑な議題について議論を深め、解決策を提示するというのは厳しい見方をすれば非現実的で表層的です。また、オンライン開催になったことで対面での駆け引きや熱量といった面白さや「華」がなくなったとあって模擬国連から離れていく同年代も数多くいました。そんな模擬国連になぜ私は取り組んでいるのだろうか、という問いに明確な答えが出せないまま全日本大会、そして今回の国際大会を迎えました。

国際大会では「電子統治」の議題で ITU(電気通信連合)の会議にインド大使として参加しました。私とペアの江口はただ既存の会議で決定された路線、政策をなぞるのではなく、インドが世界最悪レベルのパンデミックによる被害を受けている現状を加味し、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという実際私たちの生活レベルで影響の出ている問題と議題を結び付け、今ならではの政策立案をしようと話し合いました。具体的には、電子統治の利用目的を経済発展、行政の効率化のみならず社会のレジリエンス強化と定め、感染症のみ

ならず自然災害の発生などを含めた緊急時に対応するための包括的な政策を立案して会議に臨みました。

そして迎えた会議当日、30ヶ国程度を予測していた議場には僅か地域も宗教も異なる9ヶ国しか参加していませんでした。初日は公式討議やスピーチでの各国の発言を踏まえ、相当数の国家が重要視していた電気通信インフラや技術の格差(Digital Divide)を軸に、支援を求める側と行う側に分かれて議論を行いました。オンライン会議という特性上、グループごとにルームが分かれてしまう非公式討議内での議場としての情報共有、進度の把握が困難であったため、意識的に公式討議をとることで議場としての共通理解を構築しつつ小論点をトピックに据えることにより全ての参加国からの意見集約を心掛けました。会議は公式討議を中心に進み、支援の内容がある程度具体化され、触れるべき小論点が議場にすべて議論のテーブルに乗ったところでWPの提出、1日目の終了となりました。提出したWPについて議長からのフィードバックは厳しく、行動主体は勿論タイムラインや手段の妥当性を細かく指摘され、求められているレベルの高さを感じました。

会議2日目は議論内容が支援から初日に重要性が確認されたサイバーセキュリティと透明性の確保に移行し、進度の違いや重視する点の相違から初日のグルーピングを引き継いで議論が行われました。セッションの後半になり、議長から“Crisis”として「サイバー攻撃により一部参加国の機密情報が漏洩した」というニュースが持ち込まれ、会議としての対応策を決定するよう迫られました。インドはただサーバーを復旧させるのではなく、ファイアウォールシステム等で将来同様の危機が発生するリスクを抑える必要性を強く主張し、多数の国家からの賛同を得ることが出来ました。その後被支援国側が作成していた成果文書に支援国の内容を追加する形で決議案が完成し、全ヶ国の賛成により可決されました。クライシスという不測の事態でも、落ち着いて既存の政策を応用し、各国の足並みをそろえることができ良かったです。

今大会を経て感じることは、模擬国連で扱う問題は決して御伽話の世界のものではなく、実際に起こっているものだということです。言語化すると至極当然のことですが、私は温暖化によって沈む国を実際に見たこともなければ人権が尊重されないような経験をしたこともなく、今までどこか議題を「他人事」として感じていたのだと思います。しかし今回、実際に自分たちに影響を及ぼしている事象と議題を関連付け、少しでも「自分事」として捉えることで絶対的に正しい問題の「解決策」ではなく、自分ならどのように取り組むかという考えを持つきっかけになりました。

私は、ここに模擬国連活動の素晴らしさと取り組む意義があるのではないかと考えます。「各国を模擬する」というその性質上、上級者ほど自分の考えを排除し、担当国の立場を忠

実に再現しがちです。しかしながら、「担当国ならどうあるべきか」を考えるだけであったら本当の意味での議題理解は深まったとは言えないでしょう。会議で必要かどうかに関係なく、常に「自分はどうか考えるか」というベクトルを持ち続けることが、俯瞰的な視野を養成し、物事に対する考えをより深めていくのだと感じます。本大会を通じて、国の数だけ異なる価値観があることを改めて感じました。今後も多様な価値観に触れながら、自分自身の知見をさらに深められるよう模擬国連と向き合っていきたいです。

最後になりますが、このような貴重な機会を与え、支えて下さったすべての方々へ改めて御礼申し上げます。

丸小野成輝

高水高等学校

この報告書では、まず、今回の大会参加においての難所を述べ、その後、それらを踏まえたいうえで今回私が得た成長や気づきなどについて、例年と今年、そして日本と海外の比較を交えながら記していこうと思います。

今回の高校模擬国連国際大会には例年とは異なる様々な困難がありました。以下にそれらの内で主な四つを選んで述べていきます。

一つ目は、時間制限です。現状の新型コロナウイルス感染症の蔓延もあり、国際大会への参加の有無も定まらない中で決まったオンライン大会への参加でしたので、準備期間も約1か月程度とかなりの過密スケジュールとなっていました。特に、私たちの担当したSOCHUM（GA3）は肥満と低栄養を包括した栄養失調全般について、新技術による解決策を議論する、というものでした。この議題の解決は基本的にすべての国に利するものであり、扱う論点への制限もゆるく非常に広範な議題となっておりました。したがって、対立軸に基づいた議論の展開予想を立てることは難しく、予想される議論の流れ・分岐とそれに対する対応を整理したフローチャートを仕上げるというのも現実的ではありません。つまり、議論をいかに掌握し誘導するかというのが肝になっていたように思います。

二つ目は、会議が行われる時間帯が深夜だったことです。もちろん、例年もニューヨークで行われ、それに合わせて生活リズムを変える必要はあったでしょう。しかし、現地とオンラインでは決定的な違いがあります。現地では昼夜と太陽の位置が対応していますが、オンラインでは「朝」に太陽が沈み、「夜」に太陽が昇るのです。したがって、いつ寝て、いつ起きればいいのかという直感的な感覚を得ることができなかつたのが難しい点でした。

三つ目は、全日本大会と国際大会の会議進行に大きな違いがあったことです。全日本大会にはない、「Crisis」というフェーズが国際大会にはありました。これは恐らく各グループとそのリーダーが決まり、各国の立場関係が固まってしまったところに、中心となる大使が巻き込まれる事件を設定して、通常会議を中断してその事件についてその時に限り話し合わせるという、議論の活性化と対応力の評価を目的としたものだと考えられます。全く予期していないものだったため、どう対応していいのかわからなかつたというのが大きな課題でした。

そして四つ目は、英語です。もちろん母国語でない英語での議論が負担を要するものではありますが、何よりも、英語での議論というのが向こうの土俵で戦っている、いわゆる「アウェイ」な感覚を生じさせてしまいました。それによって全日本大会で発揮できたような自信を伴った姿勢を保つことができませんでした。

では、これらを踏まえ、今回得られた気づきについて述べていきます。まず、日本と海外の模擬国連を含む国際的な問題との距離感の差や意識についてです。全日本大会においては、国連の形式に則った規則と特殊な評価基準はありますが、海外派遣選抜の意味合いもあって、殊更ディベートの競争という側面が強いように思います。したがって、国連を「模擬」し、実際に国際的な解決法を国家同士で提案、交渉、妥協しながら探っていく、策定していくというよりも、いかに自らの政策を通し、リーダーシップを奪取し、そして会議でどう評価されるかというのが重視されているように思います。これは、模擬国連自体のコミュニティが小さく、そして全国から選りすぐりの生徒が集まった大会であり議論の水準が高いことにも起因すると思います。多くの大使はリーダーシップをとる大使に付き従い、時には属国であるかのような行動をとる姿も多々見受けられました。結果的に、リーダーとなった大使を中心に議論が行われる傾向が極めて強いように思います。

逆に国際大会においては、議題が協力を促すものであったこともありますが、リーダーという立ち位置はあまり意味をなしておらず、それぞれの国が対等に意見を出し合い、より協力的にことを運んでいっていました。ただし、**crisis** では特定の国家への糾弾や陣営対立があり、そこで二極型の討論という形式も取り入れているように感じました。また、決議案の作成は日本よりもスムーズで、かつ各項目の洗練度がかなり日本のそれよりも高い印象を受けました。特にこの点で、日本よりも欧米の方が国際的な問題を議論することが身近なものになっている、つまり模擬国連自体の認知度が高いという違いを痛感いたしました。

日本の大会は議論の激しさに、他方、国際大会は「模擬国連らしさ」に優れており、一長一短でどちらにも面白さがありました。しかし、昨今インターネット上で広がっている偏ったものの見方を鑑みると、より国際的な視点が日本人にとってより身近になれば、世界を知ることができ、世界と日本の違いを意識することで初めて、自国日本とそれへの帰属意識をより多角的に見つめることができるだろうと思い、そのような社会を実現するのは自分たちなのだと思いの引き締まる思いがしました。

次に、勇気というものは何を成すにも必要不可欠なのだと思感しました。国際大会の最中、眠気と緊張、不安が重なり、最初は空回りしてしまい、思うように参加することができませんでした。ここであきらめて観客に徹することもできました。しかし、安易に逃げるという選択肢は私にはありませんでした。そこで、協力的な雰囲気ของกลุ่มの中、まずテキストメッセージを使って意思疎通をはかりました。そして徐々に声も交えながら、意思疎通が円滑になるように慣らしていきました。この「テキスト」という初めの一歩が、次の一歩を踏み出す慣性になったのです。この初めの勇気の大切さを知ったことは大きな収穫となりました。

将来、私は医師として多くの人々を救っていきたいと考えています。その道中、私は多くの困難や不安、逆境に立ち向かうことになるでしょう。しかし、私はどんな状況にもそれを打開する可能性が存在すると信じていますし、信じるほかありません。その仮定の下で、可能性をつかむのに第一に必要なのは現状から抜け出す勇気です。第二に、勇気で作り出した機会を逃さない実力です。実力とは必ずしも自然科学についての能力のみを意味しません。研究医にせよ、臨床医にせよ、人間を相手にする以上、人文科学、社会科学、自然科学を問わず、国際的かつ地域的な視野で総合的に考察する力が、そして書ききれなかったほどの今回の収穫が必ず役に立つと考えています。これからも新たな挑戦へ勇気をもって進んでいきたいと思えます。

森脇優

高水高等学校

この度、15期生派遣団の一員として国際大会へ出場させていただき、感謝申し上げます。前回の14期派遣団の中止や新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、先行きが不透明な中、一時は開催されるのかという不安すら抱いていました。国際大会に参加できるのだろうかとは半ば諦めていましたが、最終的にオンラインという形で無事に開催されたことを嬉しく思います。オンライン開催の一報を受け安心した反面、基本調査からPP作成までが1か月半という、例年になくタイトなスケジュールに驚かされました。しかし、またとないチャンスを逃すまいと必死にペアとリサーチを進めていきました。グローバルクラスルームの研究の方々からの的確なアドバイスは、準備を円滑に進める一助となりました。この場を借りて感謝申し上げます。

私たちの議場の議題は「Promotion of New Technologies to Fight Malnutrition」（「栄養不良に対処するための新技術の促進」）で、担当国はインドでした。SDGs がしばしば取り上げられる昨今、フードロス削減のために家庭でも心がける等、意識の面で考えたことはありましたが、技術面での解決策を考えたことはなく、非常に興味深い反面、議論の上では難しい議題であるというのが私の第一印象でした。全日本大会は、どちらかといえば競技色が強く、対立型の議論だったので、ペアの連携を通じて議題である宇宙利用に関するスペースデブリ削減に対して国益を通すことを念頭に置き、一国の大使を模擬するという理想的な行動をとることができました。しかしながら、国際大会は打って変わって他国の出したアイデアを否定することなく、むしろ提案された政策の可能性を拡大させるという、いわば協調性が必要とされる議論だったため、これまでに日本で経験した模擬国連大会との違いに最初は違和感を覚えました。実際のところ、大使や議長はアイデアを採用しようと親身になって聞いてくださったため、私たちの議場では目立った対立軸も存在しませんでした。会議中の柔和な雰囲気は、ネイティブに比べて英語が上手ではない私の意見や主張を聞き入れてもらえるのだろうかとは怖気づいていた私の緊張を解いてくれ、積極的な発言にもつながっていき、私たちの主張の根幹であった「食糧問題対策アプリ(No Food Waste)」を決議案の中に取り入れてもらうことにも成功しました。中には会議行動に際してフォローしてくれた大使もあり、助け合いの精神を持ち合わせた紳士的態度は、平和構築を目指す国連という大きな組織を動かしているのだと実感できるほどでした。私を唯一悩ませたのは、アメリカとの時差でした。日本時間で午後11:00から午前6:00が会議の時間だったので、まさしく昼夜逆転となり眠気と戦わなければならず、相当苦労しました。

第13回全日本高校模擬国連大会にも参加しましたが、やはり、対面とオンラインとは大きく違います。話す相手が目の前にいれば、表情や声色、態度で相手の意図していることが予想でき、動きもとりやすいのですが、オンラインはそのような利点がありません。また、時々不安定になるインターネット環境により、一定時間会議から抜けたりするなど様々な不便が生じ、新たに戦略を練るのにも苦労しました。何よりも、対面で他校の参加者と会えないため、対面開催であれば築けていたであろう今後続くネットワークが築けなかったことは私にとって非常に残念でした。（事実、報告書執筆段階では、共に派遣事業に参加した他校の参加者とは一度もお会いすることは出来ていません。）

振り返れば中学1年生の時、校内で模擬国連の説明会に参加し、「高校生になったらこんな大会があるから参加してみないか」と担当の先生に誘われ、それから5年の歳月が流れました。中学校のうちは「模擬国連＝私の能力を超えた高嶺の花のようなもの」という認識で、初めて模擬国連大会に参加した時は議論についていくのが精一杯でした。次第に議論を楽しむ余裕も生まれ、参加する回数を重ねるごとに自らの成長を実感できる良い機会となり、毎回私に新しい発見を与えてくれました。そして、今回の国際大会に出場できたように、英語で相手の政策や意見に耳を傾けたり、政策を伝えたりできるまでに成長できたと感じています。

模擬国連に取り組んだ高校の2年間を通じて学んだ教訓は、「感謝」です。ここでいう感謝は2通りの意味があります。1つは、不自由ない生活を当たり前で享受できていることに対する感謝です。会議のリサーチ段階で、日本では考えられないような課題に直面している世界の国々の現状を改めて知ることが多く、日本という比較的安全な国家で友達や家族と楽しく暮らせていることのありがたさを再認識しました。もう1つは、まわりの人の支えに対する感謝です。今回、国際大会での受賞に至ったのは、ペアはもちろん、アドバイスをくださったグローバルクラスルームの皆様、先生方や家族、過去にともに模擬国連大会に参加した同級生など、様々な人から多くのサポートがあったからだと思います。国際大会を終え、高校での模擬国連活動に節目を迎えた今、次は受験勉強に打ちこむこととなりますが、忙しい時にこそ忘れてしまいがちな「感謝」の気持ちを忘れずに邁進していきたいと思っています。

青木研人

桐蔭学園中等教育学校

この文を書いている今から 2 年と半年前、僕は模擬国連の虜になりました。先輩に誘われ、なんとなく参加したはじめての模擬国連会議。会場に着いてしばらくして、突然聞こえた乾いた木槌の音。右も左もわからなかった当時の僕にも、先程まで和やかだったはずの会場の空気が一気に張り詰めたことから、その音の意味は自ずとわかりました。始まる、そう思った時にはすでにみんな真剣な、大使の顔をしていました。自分と同年代の学生たちが、一瞬で真剣な大使の顔になる様子を堪らなくかっこよく感じました。負けじと僕も顔を引き締め、胸を張ります。きっと自分はこの活動に夢中になるのだろうな、という厭に冷めた確信が会議前最後の記憶でした。お恥ずかしながら、あまりに夢中になっていたからか、会議の詳細はあまり記憶できておりません。ただ、会議から帰る道で「模擬国連の道を極める」、そう決意したことは、今でも昨日のことのようにはっきりと覚えています。

さて、あの日模擬国連を志した中学生は今、高校生となって模擬国連世界大会で最優秀賞に相当する **Secretary General Award** をいただき、その報告書の筆を進めております。書きたいことは山のようにありますが、この報告書では私の経験を効率よく体系化し最大限に還元するため、今回の世界大会でいただいた様々な評価や講評の要因として主だった二点に触れた後、世界大会を経て確立ないしは再認識できた模擬国連に参加するメリットについて述べたいと思います。

要因 1・日本で培ったものを貫けた

日本には「和をもって貴しとなす」価値観が古来より存在します。これは今回の世界大会を振り返る上で非常に重要なキーワードとなります。世界大会で我々が相手にした海外出身の大使たちは皆、もれなく個性と自己肯定感の塊のような人間達でした。個性、自己肯定、どちらも日本人に足りないと一般的に言われている力であることは言を俟たないでしょう。しかし、模擬国連において、それらの力は単体では局所的にしか利用できず、それらの力に偏重することは高度な外交交渉の場では諸刃の剣になってしまうと私は考えます。

模擬国連とは、国連大使の立場から議論を通し合意形成をする活動であって、自己主張のみでは成立し得ないものです。なぜなら、それは国連の決定事項である決議文が基本的に法的拘束能力を持たないからです。意外に思う方もいらっしゃるかもしれませんが、内政不干渉の原則がある以上、国連は決議文の強制施行という手段を取れないのです。こういった性質を持つ決議文に事実上の強制力をもたせる最良の手段として、決議文を全会一致で採択すること、すなわちコンセンサスという手段があります。現に、実際の国連でもほぼすべて

の決議文は投票前に全会一致の合意をとって、投票は形式的であるか、行われなことがほとんどなのです。

すべての大使が平等に一票を持っている国連において、過度に自己主張をして相手をやり込めることは、深刻な対立すら引き起こしかねず、それはすなわちコンセンサスを逃すことに繋がります。このことは模擬国連においても変わりません。多くの海外出身の大使たちは確立された個性を背景に強い自己主張をしがちですが、外交交渉の場におけるそれは必然的に対立を生むため、コンセンサスを逃しかねない状況に陥り安くなる危険を孕んでいるのです。

そこで求められるのが、日本の伝統的な価値観、「和をもって貴しとなす」です。個性と個性のぶつかる狭間で、取り持つべきところは取り持ち、まとめるところはまとめる。これを我々は一つの対立も起こさずに、かつ自分たちの意見をしっかり加えて完遂できました。これができたのは、我々の対しとしてのポリシーの根底に「和をもって貴しとなす」価値観が根付いていたからだと言えます。

要因2・多くの人たちから助けを得られた。

私は模擬国連をしていると、人間は「群れる」という生存戦略をとってきた生き物だと実感させられる事がよくあります。その最たる瞬間が相乗効果、シナジーを得た時です。

『項羽と劉邦』で有名な韓信は自らの軍才を評し「多多益善」と言いましたが、私も周りにいる人間が多いほどパフォーマンスを発揮できるタイプの人間だと自身を理解しています。さらに言えば、私は多少の振れ幅があれどこの傾向は多くの人に当てはまると考えています。

模擬国連において多様性は武器です。私の経験上、間違いなく小さなグループより大きなグループのほうが、会議前まで誰も思いつかなかったような斬新なアイデアを生み出す確立が高いですし、自由闊達に意見交換ができていくグループほど団結力が強いのです。

一見、自分の意見を明確に持ってなさそうな人ですら、他の人の意見に付け足す形で意見が言える、思いつきます。「群れた」人間は自分すら想定できないくらいのパフォーマンスを発揮できるのです。ある種のグループフローとでも言うべきこの現象は模擬国連の会議中だけでなく、事前準備の段階でも発生することがあります。

我々は世界大会の事前準備、リサーチの段階からなるべく多くの人に意見を求め、学校の内外を問わず、家族から在日大使館の職員に至るまで徹底的に「意見」を収集いたしました。その結果、我々が世界に持ち込んだ「意見」の結晶は間違いなく議場で一番高く大きい概念となっていました。僕はそれを「理念＝Model」と名付け、議場に展開しました。その結果、参加していた大使達が我々の Model の実現に協力してくれたのです。僕は決して強制して

はいません。ただ、大使達が「君の描いた Model は素敵だね」と言って、各自が各国大使の立場からその Model を自国で、そして世界全体で実現させる方法を考えてくれたのです。

このようなことが可能になった理由 1 つ、それは多様な意見を集めたことで、その結晶である Model が全世界の共通利益に直結していたからです。これは我々をたくさんの方が支えてくれて、その結果シナジーが発生したと言い換えることができます。

さて、最後に世界大会を経て確立できた模擬国連の良い点、魅力をお伝えしたいと思います。模擬国連の最大の魅力、それは成長のフィールドであり続けてくれる事なのではないでしょうか。私は模擬国連に出会う前、間違いなく子供でした。そんな子供が、模擬国連に出会い、先輩に出会い、仲間に出会い、後輩に出会い、師に出会い、挫折に出会い、挫折を乗り越えた先の成長に出会い、少しずつ自我を確立して行けたのです。これは本当に、ひとえに模擬国連のおかげです。あれから二年と半年が経ち、僕は青年となり、大人になり始めています。今回の世界大会はそんな僕にまで成長を可能にする場であり続けてくれました。この経験を通して私はより一層、模擬国連の教育的価値を確信するに至りました。日本の模擬国連がこれからも益々発展することを願って已みません。

また末筆ながら、新型コロナウイルスが猖獗する困難な情勢の中でも、私達に今後の人生観を更新できる貴重な機会をご用意していただいたグローバル・クラスルーム日本委員会の皆様に篤く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

田端開

桐蔭学園中等教育学校

今回の高校模擬国連国際大会への派遣支援事業に参加し、私は「他者の信頼と自己の追求」について多くのことを学ぶことができました。今回の世界大会は初めてのオンライン開催ということもあり、不安に思うこともありましたが、最終的に自分の学校に持ち帰るものを手に入れることができたことをとてもうれしく思っています。

私たちは、国連総会第1委員会「Combating the Issue of Lethal Autonomous Weapon Systems (自律型致死兵器システム)」について議論をしました。現在の規制に関する議論は技術が先行していて法規制が後手に回っています。そしてインドはすでに自律型兵器システムを配備・運用している状態にあるため、私たちは、自国の立場を崩さないようにしつつも、人類の明るい未来のために規制についても積極的に考慮していくという非常に難しい立場での議論を余儀なくさせられたのです。そこで私たちがとった方法は「議論する基盤を作ること」が重要であることを強調し、規制するかしないかの議論から逃れるということでした。これは結果的に今回の会議で私たちが提出した決議案が全会一致で可決されることにつながりました。議論の中で常に俯瞰視点を持ち、議場にとってやるべきことを考えることで今回の私たちのアプローチ方法につながったのだと思います。議場の中で俯瞰視点を持つことは国内の模擬国連活動においても非常に重要で、議場全体の利益はなんなのか、自分は何をしなければいけないのかということ意識することが模擬国連の鍵だと思います。

全日本大会では抽象度の高い理念を共有することはできたのですが、具体的な政策レベルを議場に浸透させることがうまくいきませんでした。その経験を踏まえて、今回の国際大会では「抽象」と「具体」の両方を行き来して理解してもらうことに努め、全員が政策を把握し、説明できるような状態にすることができました。これは私たちの政策が議場の政策に完全になったことを意味します。これが国際大会で実現できたことは大変うれしく思います。

外国人を相手にしながらも自分たちの政策を説明し、グループをまとめて一体感を出すなどの「他者の信頼」、説明用のスライドを作るなどしてペアの、自分の、限界に挑戦しようとし、模擬国連において自分の強みを探す「自己の追求」。これらのことを経験できたことは今回、派遣事業に参加しなければ経験できなかったことなのでとても学びになりました。このことは模擬国連以外の場での非常に重要な考えになると思っています。この活動を通じて得た、知識や経験というのは確実に人生の中で大きな物になると強く確信を持って

言えます。今後、さまざまな活動をしていく中で、今回の経験が生きるよう、精一杯努力を積んでいきます。

最後になりますが、いつも丁寧に指導をしてくださった先生方、そして今回の派遣事業で様々なサポートをくださった方々、本当にありがとうございました。

一高学仁

灘高等学校

国際大会は、想定外の連続であると、グローバルクラスルーム日本委員会の理事・研究の方や、過去の派遣生の報告書で伺っていたのですが、自分は派遣事業前に何度かアメリカの模擬国連大会に出場していたこともあり、だいたいのことは想定の内でも臨んだつもりでした。しかし、勿論想定外は起こったのです。参加大使が議場になんと6組しかいない。こんな会議は正直初めてでした。

派遣事業の国際大会までの準備は、これまで行ってきた模擬国連会議の準備とは少し違うものでした。僕はアメリカに住んでいた経験もあり、英語に不自由は感じていなかったのですが、これまで出てきたアメリカの会議等でも言語の壁はあまり感じたことはありませんでした。ただ、そこではっきりと感じられたのは文化の違いでした。それは一人一人の人間というレベルでの背景に持つ文化の差と、模擬国連というスポーツの文化の差でもありました。実際このような「差」は、オンラインの会議であると更に強調されると思います。実際そこに人がいることと、画面越しに顔が見えるのではコミュニケーションの取り方が大きく変わることは間違いなく、画面を通してその文化の差に橋を架けるのに必要なコミュニケーションの幅が失われることもあると感じます。ですから如何にしてこのギャップに橋を架け、信頼を醸成出来るか、つまり安心出来る空間を会議で作り出せるか、ということに重きを置いた準備をしました。50組ほどの議場を想定して、ブロックのマージ時に意見が押しつぶされないような、お互いの信頼と我が共存するグループを作れるように、大使達とどのように信頼関係をむすび、引き込み、そのためにどのような発言をするのかを考えていました。

ところが、参加大使が6組と分かった瞬間、全く視点は変わってしまうのです。そもそも会議が成り立たないという可能性があります。当然のことながらあまり積極的に参加や発言をしない大使もいます。リサーチ不足で、話し合う内容についての理解が十分とは言えない大使もいます。しかし、二日間の会議が存在するわけで、そこでは何か進展がないといけないのです。時折模擬国連でも国際会議や海外での会議で120組ほどの大使が出るオンラインの会議がありますが、そんな状況では議場全体の議論を引っ張っていくことは一組の大使がすることではなく、殆ど議長の仕事であり、そうでなければ逆に会議が混沌へと吸い込まれて行ってしまいます。ところが6組となると話は全く違ってきて、私は一大使として議論全体を作り上げ、導出する自由が与えられたと共に、二日間の議論を活発に存続させなければならないという危機感が降りかかってきました。とにかくそれは僕が体験した模擬国連会議のいずれとも大きく違う極限的なセッティングでした。

そんな中で結果として、動議の発出、アンモデで他の大使の意見を引き出すなど、二日間を通して、丁寧な議論を主導することが出来たと思います。議場を希望するときに、なるべく自分が強く興味を持つ議題の議場を選んでいたので、多くの資料を読み込み、広範囲にわたって議論出来る前提知識を付けられたのも、役立ちました。しかし、あまり発言できていなかった大使がいたことなど、「もう少し上手く出来たんじゃないか」と思うことが多く残っていることも事実です。

高校模擬国連の会議は、会議であると同時にスポーツだと認識しています。いかにジャッジに評価してもらえるかで勝敗が決まるため、不公平とも言えます。しかし、実際会議から何か自分が得るのがあるとするのならば、その「得るもの」というのは適用範囲が模擬国連に縛られないものであって欲しいと思っていました。それはふりかえると「適応」だったのだと思います。

会議とは本来想定外であるべきなのではないかと思っています。もし仮に全てが予測出来るような会議であれば、それは集まって話し合う意味の少ない会議ではないでしょうか。会議の結論がシミュレートされて、周知されれば用が済むわけです。会議から何か新たな価値が創出されるのであれば、それは概ねみんなの予想外の発見が集合したような結果に辿り着くことだと思います。では、その予想外の議論の展開のなかで貢献できなければ、自分は単純に「貢献できない人」でしかなくなってしまいます。ということは自分は想定外の議論の流れ、発言に対応できなければなりません。そういう状態においても、何かを貢献できる人に近づく力を模擬国連は問うているのではないかと思います。

今回、結果として世界銀行議場で最優秀賞である **Secretary Award** を頂くことが出来ました。スポーツにおいて勝つことが出来たことに安堵したとともに、6組しか大使がいない会議の中での自分を振り返り、模擬国連という枠を取っ払ったときの自分を省みるきっかけにもなりました。賞を取ったということ自体ではなく、それを模擬ではあっても一つの「会議」として捉えたときにどれだけ価値を生み出したのか、序盤に会議が続くかどうかすら怪しいタイミングがあった中で、自分はどれだけ場に安心感を醸成出来る存在だったのかなど、より大きな文脈、そして次なる一步に繋げられる形で反省する機会となりました。

最後にはなりますが、この場をお借りして、このような貴重な体験をさせていただいた今回のパンデミック下でのイレギュラーな派遣事業をいつも支えて下さった、全ての方々に感謝申し上げて、私の報告書とさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

田中愛莉

宮城県立仙台二華高等学校

きっかけは教室にひっそりとあった1枚の貼り紙でした。それを見た私が「面白そうだから一緒にやろうよ」とペアを誘ったのが始まりです。試行錯誤して書類を提出し、出場が決定。なんのノウハウもない中、課題とポジションペーパーを埋めつつがむしやりに準備をし、全日本大会に参加しました。当日は人生で1番空気を読んだと思います。自分たちの膨大な準備の成果とペアを信じ、他の大使の見よう見まねで動きました。そして表彰式の時、地域特別賞で仙台二華高校の名が呼ばれました。そして私達は全日本高校模擬国連大会にて国際大会への切符を手にししました。その時の驚きと感動は一生忘れないと思います。

国際大会は本当に困難の連続でした。3月初旬頃にはコロナウイルス感染症の影響によりオンライン開催が決定し、実現できそうに思えないほどタイトなスケジュールでした。本当に実現できるのだろうかと不安を抱えながら参加意思を表示し、出場する会議がIMF(国際通貨基金)に決まった3月下旬から準備に取り掛かり始めました。するとすぐハプニングが起きました。ペアが準備に参加することが難しくなってしまう、ほとんど1人で準備をすることになってしまったのです。会議の内容が難しく金融の基礎を理解することで精一杯の状況だったため、正直絶望しました。準備も課題の提出も間に合う気がせずどんどん追い込まれていきました。ポジションペーパーを諦めることも真剣に考えるほどです。そんな時友人や家族にも多くの励ましと応援を受け、担当の研究の方や、学校の先生方に本当たくさん助けていただきました。何度も心が折れたけれど、周りの人に支えてもらって無事課題を提出し、本番を迎えることができました。

日中の体育祭を終えて迎えた本番。音声トラブルにより議場の流れの把握が大変難しく、置いていかれがちでした。特にアンモデでは手も足も出ません。しかし、このままでは終われないと必死で食いつきました。モデでは話題を何となく感じ取り、必死に主張を伝えました。その成果なのか他の大使の方に気にかけていただけるようになり、少しずつ流れに乗れるようになりました。そして深夜に行われた計12時間に及ぶ国際大会を終えました。達成感に浸りつつ眠りにつき、通知音で目を覚まして見てみるとペアから「ポジションペーパー賞だよおめでとう！」とLINEが届いていました。3度見しました。まさか賞を取れるとは思ってなくて、受け入れるのに少し時間がかかりました。驚きましたが、自分の必死の頑張りが表彰されたことは本当に嬉しかったです。諦めそうになっても、ポジションペーパーの提出を諦めなかったことが賞につながりました。諦めないって大切だと実感しました。

今大会でニューヨークに行けなかったのは本当に残念でしたが、かけがえのない経験をすることができました。最初は初心者だし、オンラインだし、参加することに意味があると思っていました。しかし、研究の方の親身なサポートや、周りの助けや応援を受けるうちにどんどん本気になっていきました。膨大な準備のおかげもあり、模擬国連本番では刺激的で本当に楽しい時間を過ごすことができました。また、同時に国際問題がどれだけ複雑で解決が困難なものかを思い知らされました。大学に入ったら模擬国連を本格的に始めようと考えています。世界に溢れるさまざまな困難な問題にどんどん立ち向かっていきたいです。

最後に学校の先生方や、友人、今まで出会った大使の方々、運営の方々に深く感謝します。本当にありがとうございました。

支援団体一覧

本事業の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます (敬称略)。

【後援】

外務省 文部科学省 国際連合広報センター

【協賛】

アンリツ株式会社



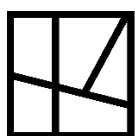
株式会社エヌエフ回路設計ブロック



株式会社公文教育研究会



株式会社講談社



KODANSHA

株式会社内田洋行



キックマン株式会社



GC&T (株式会社公文教育研究会)



株式会社 JTB



感動のそばに、いつも。

学校法人駿河台学園



一般財団法人凸版印刷三幸会

TOPPAN SANKOKAI

株式会社ナガセ



株式会社ニチレイ



Global Learning Center
(ベネッセコーポレーション)



お茶の水ゼミナール
(ベネッセコーポレーション)

Benesse® お茶の水ゼミナール
海外大併願コース

学校法人高宮学園 代々木ゼミナール



トヨタ自動車株式会社

TOYOTA

株式会社日能研



ブリタニカ・ジャパン株式会社



海外トップ大進学塾 Route H
(ベネッセコーポレーション)



三菱商事株式会社



【協力】

日本航空株式会社



みらいふ



【助成】

公益財団法人公文国際奨学財団

日本航空株式会社様からのメッセージ

日本航空株式会社
執行役員
旅客営業本部 営業統括
中野星子

高校模擬国連第15回日本代表団として出場された皆さま、おめでとうございます。今年は例年とは異なり、新型コロナウイルス感染症の影響により、ニューヨークへの渡航が叶わず、オンライン開催となり、残念に思っている方もいらっしゃることでしょう。皆さまは、出場に向けて、制限のある環境下、仲間の方々と日々努力を重ねてきたことと存じます。その成果は、今回、皆さまのプレゼンテーションをオンラインで拝見する機会を頂戴しましたが、如実に表れておりました。

今年はオンライン開催ではありましたが、文化も歴史も考え方も異なる世界各国の方々と様々な議題に対し、真剣に議論し合ったことは皆さまにとって、何物にも代えがたい、かけがえのないものになったと思います。大会への挑戦と努力、そして、その大会に出場した経験は、今後の皆さまの人生においても大きな宝となることでしょう。将来における皆さまの活躍を心からお祈りしております。

日本航空グループは、「世界で一番お客さまに選ばれ、愛される航空会社」になることを目指し続けます。そして、高校模擬国連国際大会に参加される皆さまを熱い思いをもって応援し続けて参ります。

来年は、新型コロナウイルス感染も収束し、出場者の皆さまをニューヨークまでご案内することが叶いますようお願いしております。

最後に、出場された皆さまをはじめ、この高校模擬国連国際大会に携われた全ての皆さまのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



ACCU からのメッセージ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

国際教育交流部 杉戸 卓磨

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) では、平和で持続可能な社会の実現のため、全国の高校生に対し、国連会議のシミュレーションである模擬国連活動を通して、世界のあらゆる課題について学ぶための教育の機会を 2012 年より提供しておりますが、運営にあたり「国際社会や地域社会に主体的に貢献できる人材を育成する」という趣旨にご理解・ご賛同を頂いた企業様・団体様にこの場を借りまして改めて深く御礼申し上げます。

さて、今回の第 15 回日本代表団派遣事業は本来であれば、第 14 回全日本高校模擬国連大会で選抜された高校生を、2021 年 5 月開催の高校模擬国連国際大会 Global Classrooms International Model United Nations High School Conference (GCIMUN) に向けて米国ニューヨーク市へ派遣するところでありましたが、COVID-19 の世界的な感染拡大の終息が見通せない状況のため、昨年につき派遣中止となり、代わりにオンライン大会への参加となりました。

なかなかスケジュールが定まらない中、北米時間での開催のため昼夜逆転の時差や使い慣れないオンラインプラットフォームなど、普段は経験できない二日間の厳しい環境を乗り越えて、他の大使と議論を積み重ねていった経験は、派遣生の将来に生きてくる貴重なものであると考えています。なお、今回はオンラインということもあってか、GCIMUN の各委員会はかなりの少人数での参加となっていました。その点では各大使一人一人の参画意欲は高まり、中身の濃い議場行動ができ、それぞれが足跡を残す働きができたと思います。

また、オンライン大会参加後の報告会を 6 月 20 日に実施させて頂きましたが、冒頭に長年運営にご協力頂いている日本航空株式会社様から「模擬フライト NY15 便」の企画賜りました。オンラインで本社・ニューヨーク・シンガポールを繋いで頂き、英語にて派遣生と交流を深めて頂きましたこと心より御礼申し上げます。また、ユネスコ・パリ本部から斎藤樹里様をアドバイザーにお迎えし、近い将来世界に羽ばたいていくであろう派遣生に向けて、温かいコメントやエールを頂戴しましたこと厚く御礼申し上げます。

最後になりますが、本事業の開催にあたりご尽力頂いた関係各位の皆様重ねて御礼申し上げます。来年度以降は JCGC が単独で本事業を実施することになりますので引き続きご支援を頂きますと幸いです。今後も ACCU は、次世代の人材育成、若者が国境を越えてともに学びともに成長する機会を創出するため、精一杯努めて参ります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

MEMO



お知らせ

グローバル・クラスルーム日本委員会は、2021年6月に公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターとの事業共催関係が終了したことに伴い、2021年8月より、一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会に名称変更をして活動を展開する予定です。今後とも、弊団体へのご支援・ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

編集・発行

グローバル・クラスルーム日本委員会
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行：2021年8月
